けがらわしきは

ハルメク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
けがらわしきは

【Ｎコード】
Ｎ５５８５Ａ

【作者名】
ハルメク

【あらすじ】
汚らわしい欲と脳。私たち誰もが抱いている。

―――地上の蟻と地上の人類との違いは汚らわしい欲と脳があるかないかの違いである。

蟻の頭部の切断面は、白い色をしていた。まるで寒天が蟻の頭に詰まっているようである。

私は庭の片隅に出来た蟻の住処を見つけた。周りには黒蟻が群れて小さな砂粒を口に挟んで運んでいた。

その中から一匹、指で摘み良く切れる鋏で蟻の頭部を切断した。それでも蟻は死なず私の指先でもがいていた。

蟻の頭の中は透き通った白色なので蟻はきっと純粋なのだろう。

しかし人間の頭の中は汚い色をしている。私はそれを想像すると吐き気をもよおす。

「さあ働きましょう。働きましょう。わたしたちは働き者。さあ働きましょう」

蟻の一匹が声高にそう言っていた。気づくと私は蟻の群の中にいた。

「働いて働いて石も死骸も運びましょう」

その蟻は私を見つけた。

「さあさあ、そこの蟻さん。体を動かして働きましょう。死骸や砂粒を運びましょう」

私は蟻になったようである。そういえば足が六本もあるのは変だった。私は蟻である。

「しかしなぜこんなに暑いのに働くのですか？　喉が乾いて干からびそうだ」
私は言った。
私に声を掛けてきた蟻は口をがちがちと鳴らして、
「働くのがわたしたちの役目です。大丈夫、干からびたあなたの死骸はわたしたちが運びますから」
がちがち、と口を鳴らし蟻は去っていった。　私の横を何匹もの蟻が通り過ぎていく。

仕方なく私は砂粒を運ぶことにした。
手頃な大きさの砂粒を見つけ口で挟もうと思ったが上手くいかなかった。人間だった時とは要領が違う。
口をすぼめるようにしてやっと砂粒を挟むことが出来た。
六本の足で歩いて巣穴まで行こうとした。

「逃げましょう。逃げましょう。わたしたちは逃げましょう」

その声が聞こえて、黒蟻たちは一斉に散らばり始めた。巣穴と反対方向に行く蟻もいた。

いきなり圧迫された。体が宙に浮いた。
人間が私を捕まえたのだ。その人間は良く切れそうな鋏を持っている。その刃先が私へと近付いてキ

その蟻の頭の中は汚い肌色をしていた。茶色に近い厭な色だった。

見ているだけで吐き気をもよおすほどに。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5585a/

けがらわしきは

2011年10月2日23時22分発行